

佛果暴騰

中四 結城瑞光

戦争の特産物として必提的名物は物價暴騰である各國通じて窮民が蜂起する其の痛苦悲惨の狀況は實に見聞に堪え難い程で、之嘗に政府當局の失政歟將た吾人の怠慢が起因するのであらう乎。此處を宗教家と自任する人々に聞きたいのだ。つまるところ世の中に品物が無くある景氣は好しと云ふ具合だから、物價は遠慮おしに騰貴する、自然下層中層の輩は背息太息にあり一家の妻君奥様と云ふ芳姿蟬妍の御歴々迄が袖や袂の蔭に籠や鍋を忍ばせて米穀屋の前を逍遙すると云ふ譯にあるのだ。物價變調の苦痛は、随分精神方面に影響を與へるもので、終には人獸共通の本能作用より外に人間として尊貴を所以たる認識も道義も遂に没却されて仕舞ふのである。其れ故に國家と云ふものが僅かな事から倒壊する様な破目に陥る。先般各地に忿起した暴動も其の危険な先振であつた。日

本などは割合道德觀念が他國に超越して堅固だから左程大損害もないが、彼の獨逸の國內に起るパンの叫びには、政府及百折屈せず千挫撓まざる剛毅の怪世留迄が四面楚歌の聲より以上に恐れて、四方八方鎮壓手段を講じて居るではないか。僅かパンの喚びが國家の盛衰に關係すると思へば當局者の責任は重大なものである。暴動の事實よりも暴動の原因を考究して貰いたい。焼打もやれば人殺もする、果は虚無主義的行動も執り兼る、眞に慷慨の至りであるが、之が當然の成行だから仕方がない、感化院や救世會の三つや四つ設立した所で焦眉の急に間に會ふものでない。然れば如何したら此暴動を鎮靜するかと言ふに、人の根本思想即ち人心の奥底を支配する宗教觀念の改革に頼る計りだ。例へば近頃政府が米の暴騰に震駭して米の收用令を戒嚴的に布告したが、まああの位の所で永久に經續するか何うかは疑問である。其れより始めから此の暴動を起させねば能いではないか是れが一番の大問題なのだ、暴動の結果は暴利商

人は其の不法行爲を指摘せられて散々か目に遇つた、人心の趨く所は不道德の人間を攻撃すると云ふ事に結着する、何故宗教家が如斯き不道德な人間を造しらへたか正順道德の行あつて人格の崇高權威の甚大か生佛様でも教ゆる法が間違つて居れば墮獄に導く破戒僧々のだ、無救濟の法、無道德の僧が今日の宗教家と自任して居るから堪まらぬ。及ばず影響は暴動と成り騒動となつて國家の安定に迄動搖を來す、して見ると宗教家の責任と云ふものは頗る甚大なものと自覺せねばならぬ。

自覺した所で自己の信する教義其のものが元世期時代の思想で自ら宗教家なると僞稱する者は本當の醜狂家とも稱すべき一匹の恐る可きバチルスだ此の黴菌が世界人類の大部分を侵蝕して居るのだから大戦も惹起すれば暴動も發展する、思想堅固な現代及未來向宗教病院に入院せむとする多數の患者有る故に、現安後善の健康を與ふべく、折伏逆化の施術をなし、色香美味具足の大良藥を投じて、惡想妄見の重病子を救ひ給ふ。是れ吾祖聖人

の五綱立脚三大秘法開示の宗教である。

聖滅已來數百年、吾祖門下の弘教は、果して此の聖意を体し來つたか何ふ歟、末法五濁の惡思想に據る傳染病者を全快させ、一天四海皆歸妙法の理想を建設せんと努力遊ばされた宗祖の濶大を抱負も正明なる理想も承繼せずして、曲舞絲竹の調に現を抜かず痴漢が本化門下と自ら名乗り、宗祖の死身弘法の努力も水泡に歸せしめた。隨つて傳染患者も増衍し物價も暴騰して國家沈衰の境遇に没落するのである、大正の聖代は人心の腐敗甚敷き秋である、それだけ反響も強硬である。何處か生活の安往處を求めたいと云ふ即ち凡界に即して佛界を成じ度いと希ふが、さて佛果暴騰の現今そう容易に得られるものでない。生死流海の苦惱に耽溺せる衆生は、須らく國家と消長を俱にする日蓮大聖人の襁褓に抱擁されなければ安住心不亂の生活は覺束かいのである、御互吾人に此の信念を扶育させるには是非とも聖祖正明の遺訓たる日蓮主義を奉体する眞に宗教家に成らねばならぬ、然

して後衆生に知法思國の精神を啓發せしむる様に
するのが宗教家の責務であり、眞の義勇奉公と云
ふ可きである。義を見てせざるは勇無く、義を見
て爲ざるは本化の徒に非ず、若し今日の暴動者及
び被害者も日蓮主義を奉持して居たらば米の有
るに騰貴させる様か不道德漢は無かつたらふに思
へば主義傳導者所謂門下生が怠慢で有り不誠實で
あるから社界人心が邪義に隠掩されるのであると
痛切に感ずる。最高の宗教道德が確定すれば不道
徳の人間が無くなるから天下萬民一同吹風枝不鳴
の安樂處に到達する事が出來ると、之は余が決し
て疑はぬ所、宗祖觀心本尊抄の四十五字の法体
は余の證明の根據である。特に自ら日蓮主義傳導
者と僞稱する人々の覺醒を強要する。

平和の巷

望月海正

初秋の陽が眞紅き夕陽雲に名残を止めて西の空
に沈み蒼然たる暮色は木立も深き此辟地を覆ふて

寂しさはました——その暗きを破つて光々たる月
は東天に掛り圓滿な姿を現はした。憐れむが様に
悲しむが様に又欣然たるが如き其面——私はジ
ツと其れを視入つた。茫然として立つた。其間起
つた感？それは此んな事であつた。自分は今こう
して茫然と月を眺めて居る。此月同じく世の凡て
の人は眺めるであらう。バルコニーで眺むる月、
賤が屋に荒蕪の上で眺むる月、或は都の月、田舎
の月、と眺むる人、場所等に依つて、各感は色々
であらう。就中故國を後に何百里、荒鷲かける彼
の廣野に在つて刀にうつる、其月を眺むる我同胞
如何に國の爲、君が爲と捧げまつた身なりとも
木石からぬ人心さすが故國戀しと打仰ぐであらう
あゝ思へば何故にかゝる悲惨を振舞をせねばなら
ぬ人生か、あたら貴き人命を野菜同様に切捨て、
而もそれで満足に思ふ。居る。なんと云ふ野獸的
行爲であらう、自己の生命が貴いと同様に他人の
生命も輕んずべきものではない、これが萬物の靈
長と誇る人間の行であらうか、又本能であらうか